

アルファアルファ作戦

筒井康隆



中公文庫



中公文庫

アルファルファ^{さくせん}作戦

定価はカバーに表示してあります。

1978年7月10日初版発行

1996年1月5日改版印刷

1996年1月18日改版発行

著者 ^{つつ い やす たか}
筒井康隆

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA, INC. / Yasutaka Tsutsui

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202516-8 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

アルファアルファ作戦

筒井 康隆

中央公論社

目次

アルファアルファ作戦

近所迷惑

慶安大変記

人口九千九百億

公共伏魔殿

旅

一万二千粒の錠剤

懲戒の部屋

色眼鏡の狂詩曲
ラフソディ

解説

曾野綾子

315 283 255 231 197 159 125 95 57 7

アルファアルファ作戦

アルファルフア作戦

世の中にはいろんな特技を持った人間がいるが、ヘンリー・ブラウン爺のような特技を持った者もちょっと少ないだろう。この爺さんは、卵の殻をこまかく砕いて食い、尻から卵を産むという芸を持っている。もっともその卵を割ったところで、中には大便がぎっしりつまっているだけなのだが。

ある晩おれがそのヘンリー・ブラウン爺さんといっしょに養老院の屋上で無駄話をして
いる時、西の空に炎と火の粉の立ちのぼるのが見えた。

「あれが火事だということは、火を見るよりもあきらかじゃ」と、ヘンリー・ブラウン爺
さんがいった。

「あたり前だ。あれは火です」

おれはあわててTV室へ行き、西側の町のあちこちに設置してあるテレビカメラから常
時送ってきている映像のスイッチを、順に入れて眺めた。

音楽堂、商工会議所、西中央公会堂、熱帯植物園などの建物が、その滑らかな美しい皮膚を焦がし、華やかな装身具を剥落させ、はげしい炎の底で身もだえていた。

「あの音楽堂は、この市で最も古い建物じゃ」ついてきたヘンリー・ブラウンが、おれのうしろからスクリーンを覗きこみ、怒りに身をふるわせていった。「何者があのようなことを」

おれは聞き咎めて、ヘンリー・ブラウンをふり返った。「自然発火じゃないというのですか」

「この町には自動消火設備が整つとる」と、彼はいった。「自然に出た火があんなに大きくなるということは考えられんわい」

「消火班を出さなきゃならない」と、おれはいった。「全員に集合してもらいましょう」

おれたちはすぐ、十三階の放送室へ行つた。ここからは養老院の全個室に向けてテレビ放送ができるようになっていた。スタジオでは『御存知ロメオとジュリエット・バルコニ―の場』が演じられていた。ロメオを演じているのはもとテレビ・タレントで今年二百八十九歳の花村ススム爺さん、ジュリエットに扮しているのはもと歌手で、当年とって三百九十一歳のリンダ香川婆さんである。

ひろみだとかリンダだとか、あるいはじゅんとかユカリだとか、サオリとかカオリとか、

三百年くらい前までは子供にやたらスマートな名前をつけたものだが、彼らが老人になった時にそれらの名前がいかに不似合いなものになるかということを、彼らの親は考えなかったのだろうか。おれにはどうも、そうとしか思えない。

「ロメオ！」

若造りのリンダ香川が立っているバルコニーに、やはり濃いメイクアップで青年にふんじた花村ススムが、ツタを足がかりにしてよじ登ろうとし、義足の蝶番をはずしてフロアへ転落した。

「ロメオ！」

副調整室にいる、もとディレクターの如虫潰爺ルーチヨンキさんが、あわててカメラのスイッチを切り替えた。

「大道具が悪いのじゃ。ツタに足がからまった」放送中であるにもかかわらず、花村ススムはフロアへ大の字にひっくり返ったまま、手足をばたばたさせてわめき始めた。

「ロメオ！」

「わしの仕事にケチをつけるのか」美術係のサブ木村爺さんが、セットの裏から怒ってとび出してきた。

「そこまで」おれはスタジオの中央に進み出て、カメラに向かった。「臨時ニュースです

ので、ドラマを中断します」

「あらあ、二週間もかかって稽古したんですのよ」リンダ香川がバルコニーの上から、恨めしそうにいった。

「西九番街に火事が起こっています」と、おれはカメラに向かっていった。「自動消火でも駄目なようですから、対策を考えなければなりません。皆さん至急三階のホールに集まってください」

「なぜ自動消火装置が働かなかったのじゃ」

「放火にちがいありませんわ。誰のやったことでしょう。誰もいないはずなのに」

ホールに集まった老人たちが、口ぐちに質問してきた。

「お静まりください」と、おれは壇上に立っていった。「どちらにしろ、延焼を防ぐため消防隊を出さなければなりません」

「その指揮はわしがとる」すでに、組の火消し装束で身をかためた八十五代目の菊五郎爺さんが立ちあがった。

「お祭りではありませんぞ」もと消防夫のアーサー・コンプトン爺さんがいった。「防火当番はちゃんと決つとる。指揮はわたしがとります」

おれは指揮を彼にまかせることにした。老人たちはみな権威主義的になっているから、

若いおれなどよりは本職のアーサー・コンプトンのいうことをよく聞くにちがいない。

アーサーは張りきっていた。彼は仕事以外に興味がなく、養老院では今まで身をもてあましていて、何の遊びもやらず、ただ懷古談グループに加わっているだけだったのだ。

「当番の人は作業服を着てください。ミルトン、君は消防車を出してくれ。マージョリイ、如雨露^{じょうろ}なんか持ってきてどうするつもりじゃ。花に水をやるんじゃないですぞ。さあ早く乗ってくれ。みんな乗ったかね。ミルトン、出発じゃ」

十人あまりの老人とおれを乗せ、黒人でもとタクシー運転手のミルトン爺さんによって三百五十年ぶりにガレージからひっぱり出されてきたクラシクな消防車は、どこかかんととのべつまくなしにバック・ファイアの音を立てながら、夜の舗装道路をがたがたと走り出した。両側は数十階もあるオフィス・ビルとマンションだ。

「そんなに鐘やサイレンを鳴らしたって、この町にはわれわれ以外誰もいないですよ」と、おれはアーサーにいった。

「景気づけじゃ。この音を聞かんことには身がひきしまらんのじゃ」と、彼はいった。

「どっちの道を行くかね」運転席のミルトン爺さんが、震動のたびに義齒^{いねば}を出したり入れたりしながら叫んだ。

「山手通りへ出よう。北には放水路があるから、あそこはほっといてもいい」と、アーサー

ーが答えた。

「ちよつと車を停めてくださらんか」と、ヘンリー・ブラウンがいった。「^{かつら}髪とばした」
「いかんいかん」アーサーはわめいた。「^{かつら}髪などより火事が大事じゃ。ミルトン、停めてはならんぞ」

「クルマ、トメナサイ」^{ルーチヨンキ}如虫潰がいった。「ショウペンカ、テタイ。トシトルト、ショウペンカ、チカイ」

「いちど車を停めたらどうです」おれはアーサーにそういった。おれのからだでさえ、ばらばらになりそうだった。

「いかん」アーサーはかぶりを振った。「小便なら車の上からやれ」

消防車はやつと現場に到着した。

火は西八番街にまで拡がりはじめていた。炎を背景にした黒いシルエットのビルの上への窓から、鮮紅色の細い舌がへらへらと躍り出ていた。

「止めなさい。そこに消火栓がある」アーサーが叫んだ。

ミルトンはあわててブレーキを踏んだが、旧式のタイヤはエア・カー用の滑らかな道路でスリップし、さらに二十メートルほど走ってから消火栓に衝突した。老人たちがばらばらと車からころげ落ちた。

「痛い。いたい。義手がひん曲った」

「義眼いれめがない。どこかへ飛んだ」

「大変じゃ。尻が割れた」

路上へひっくり返ったままわめき続ける老人たちに、アーサーが怒鳴りつけた。「そんなことでどうするのじゃ。火はそこまできておる。立て皆の衆。立ちあがれ。立ってホースを持て。わしたちはこの町を、この星を護らなきゃなんのですぞ。若い奴らはみんな、この地球を捨てて行きおった。地球を護るのはわしらじゃ。わしらだけなんじゃぞ。立ちなされお立ちなされ」

老人たちは急にしゃんとして立ちあがり、消火作業にとりかかった。

おれはホースの先端を持ち、渦まき炎めがけて走った。おれは養老院の責任者なのだから、消火作業をすべて老人たちにまかせておくわけにはいかない。ひとりでも死者が出るとおれの給料が減る。

おれのうしろにはヘンリー・ブラウンが続いた。

「ホースの先を、わしに持たせてくれ」彼はあえぎながらそういった。「燃えとるのは西八番街ホテルじゃ。あそこにはおれの大切な思い出がある。どうしてもわしが消さにゃならん。あそこのロビーで、おれははじめてメアリー・ルウに会った」彼の頬の涙に、炎が